

多治見市美濃焼ミュージアム

所在地 岐阜県多治見市東町1-9-27

設置者 市町村(多治見市)

博物館類似施設／美術博物館



「アール・ブリュットMINO+」

2021年度実施

発表・連携

岐阜県東濃地域を中心とした岐阜県在住の障害者37名が創作した作品（陶芸作品に限らない）を展示した。長年障害者のワークショップや表現活動の支援を続けている「アール・ブリュット美濃展事務局」、岐阜県障がい者芸術文化支援センターの「(公財)岐阜県教育文化財団TASCぎふ」、「多治見市美濃焼ミュージアム」の三者が主催者となり実施した。多治見市美濃焼ミュージアムは主に会場提供として参画。TASCぎふが行った「tomonartのフェスティバル2021」の一企画となっており、展覧会期間中には、来館者が参加できるワークショップや、市内の生活介護事業所による音楽ステージなどのイベントも行われた。

取材日 2023年12月12日

回答者 岩井利美(多治見市美濃焼ミュージアム 館長)



「アール・ブリュットMINO+」

この事業のきっかけを教えてください。

元々、3年に一度開催されている「国際陶器フェスティバル美濃」の折に「アール・ブリュット美濃展」として、セラミックパーク MINO¹ で開催されていたものがありました。私も「アール・ブリュット美濃展」は何度か観ており、障害のある人もそうでない人も、物をつくる行為や想いは一緒であり、物をつくることをエンjoyできる雰囲気も同じである、という根本的な理念に共感していたところがありました。

それがコロナ禍で国際陶器フェスティバル美濃の開催も危ぶまれ、「アール・ブリュット美濃展」など関連企画は全て中止となってしまいました。これではあまりにも残念だということで、多治見市美濃焼ミュージアムが会場を提供する形で、「アール・ブリュット美濃展事務局」、岐阜県障がい者芸術文化支援センターの「(公財)岐阜県教育文化財団 TASC ぎふ」、「多治見市美濃焼ミュージアム」の三者主催による「アール・ブリュット MINO+」の開催が実現しました。

2024年は、元の「アール・ブリュット美濃展」として、セラミックパーク MINO での開催になる予定です。その際には、出展作家さんの制作の場として、多治見市美濃焼ミュージアムの会議研修室を提供する予定になっています。

¹ (公財)セラミックパーク美濃が運営する、展示ホール、国際会議場、茶室、ショップ、作陶施設などを備えた施設。岐阜県現代陶芸美術館と併設されている。



「アール・ブリュット MINO+」の展示の様子

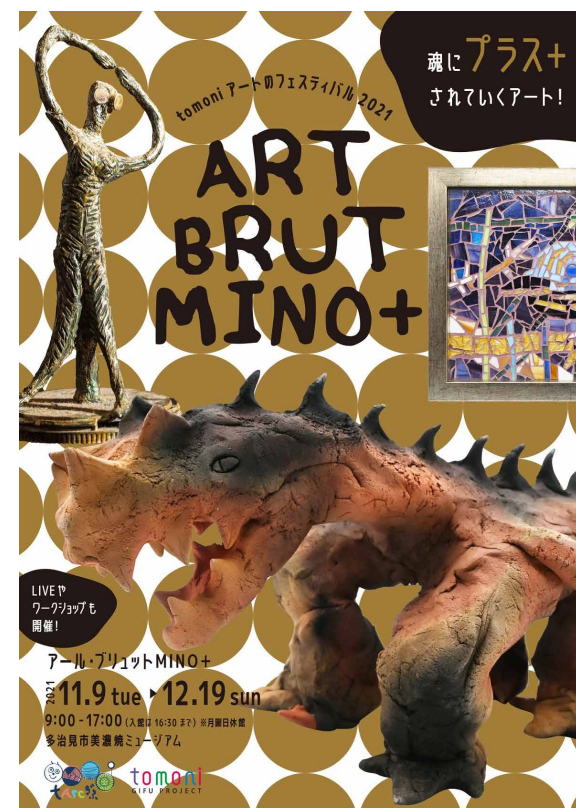
どのようなプロセスで企画、実施を行いましたか？

多治見市美濃焼ミュージアムは会場提供という立場でしたので、実際にあの展示を取り仕切ってくださったのは、「アール・ブリュット美濃展」でいつも活躍されている「アール・ブリュット美濃展実行委員会」の方々でした。作品の募集の呼びかけや集客なども、そうした方々の持っている繋がりで広めていただきました。

展示した作品は陶芸作品だけに限りませんでしたが、とくに焼物の場合は、粘土で造形して、乾燥させて、焼いて…と、作品ができるまでに時間がかかりますので、制作するにも年間計画を作る必要があります。そうした活動の場や、制作できる環境を支えているのが、隣の土岐市で障害のある人たちと創作活動をしているアトリエの方や、多治見市で作陶の職業訓練などを行っている障害者支援施設の先生方などです。展覧会期間中に、ワークショップや音楽会

も行いましたが、それらも彼らの持っている繋がりからできたことです。

岐阜県障がい者芸術文化活動支援センターの「TASC ぎふ」の方では、チラシを作成したり、立派な報告書をまとめたりされていました。とくにチラシなどは、我々が当館の企画展でつくるような簡素なチラシではなく、非常に工夫を凝らしてあるもので、私はそれをとても肯定的に捉えました。こうしてしっかりお金をかけて、美しく立派な仕上がりにすることで、障害のある人の活動を支援することへの心構えや心意気、財政的なサポートを広く市民に知っていただけた一つの方策になったのではないかと考えています。



「アール・ブリュット MINO+」チラシ

こうした取組の実施にあたり、 相談する相手や、知見やヒントを どのようにして得たのか教えてください。



岐阜県博物館協会の東濃エリアの研修会で、特別支援学校との連携をテーマに採り上げ、特別支援学校の教頭先生に来ていただきました。そうした研修の機会で学ぶことも多いですが、やはり一番は、障害のある人たちと創作活動をしているアトリエの方など、障害のある人の周辺にいる方々から教えていただくことが大きいです。ある方が「障害は厄介なものというよりも、個性だよ」とさりとおっしゃって、そうか、と思った経験があります。

また、過去にヒアリング調査に答えたことがきっかけとなって関係が深くなった「(一財)たんぼぼの家²」の方々から学ぶことも多いです。2023年3月に、たんぼぼの家の方々が企画して、当館で美濃地方の数種類の粘土で顔料をつくって布バッグを染めるワークショップを行いました。当館の職員も、いろいろと巻き込まれて一緒になってやっていくうちに、「ああそうか」という感じでわかっていくところがあったように思います。たんぼぼの家に限らず、「来るもの拒まず」で対応しているうちに、館の許容範囲が広がってきたように思います。

一方で、個人的な経験ですが、私が岐阜県現代陶芸美術館にいた際に子どもたちの展覧会を立ち上げ、岐阜県内の盲学校の子どもたちも出展してくれたことがあります。その作品を彼らが観に来てくれたときに、これなら触ってもいいという作品を事前にいくつか用意し、手で触って鑑賞してもらいました。彼らは友達の作品をととても大事に真剣に触って観ていて、私はそのとき

2 アートとケアの視点から、多彩なアートプロジェクトを実施している市民団体。ソーシャル・インクルージョンをテーマに、アートの社会的意義や市民文化について問いかける事業を実施している。令和4年度に、文化庁委託事業「令和4年度障害者等における文化芸術活動推進事業」の調査の一環で、多治見市美濃焼ミュージアムにヒアリング調査・ラーニングプログラムを実施している。

初めて「手で観る」ということを覚えました。それが、今の多治見市美濃焼ミュージアムで行っている、本物を掌に抱いて鑑賞する「特別鑑賞会」に繋がっています。実際に、400年以上前の作家作品も手に取って鑑賞してもらっています。もちろん、作品のコンディションや、指輪や腕時計を外して畳の上で鑑賞してもらうなど、リスクを考えて気を付けなければならないことはありますが、茶碗というのは「手で触ってなんぼ」、もっと言えば使ってみなければ、本当の意味でその作品の良さをわかったことにはなりません。活用というのは、ただ便宜的に展示場所を考えたり、館外へ持ち出すとか、あるいは展示方法を工夫するといったことだけではなく、それをどう使えるのかということを考えることだと思っています。

こうした取組を進めるにあたり、 どんなことが大事だと思われますか。



何事も、「相手から学ぶ」ということだと思います。展示室で大きな声が出てしまう人、床に寝転がってしまう人、難しい知識をずっと口に出しながら観て回る人…。いくら頭で障害者について知識を持っていたとしても、これらが「程度の差」と言われても、理解が難しいところもあります。けれども、子どもでも、どんな来館者でも、「そこにある姿」が本物なのです。対面で向き合って、それが普段の彼らの姿なのだとことを知れば、そのまま受け止められます。そういう機会を重ねることを通して、だんだんと相手への理解が深まっていくのだと思っています。

先日も特別支援学校から10人くらいで来館されましたが、全員が全員、じっとしていることはありませんでした。私も特別支援学校や、そこでの子どもたちの実情をもっとよく知って、少しずつ繰り返し、一つひとつ勉強していかないといけないと思います。

また、当事者を知るだけでなく、地域のグループホームや放課後デイサー

ビスなどから来館されたときなどに、支援者の方と顔見知りになって「この会議室が使えるよ」などといったことを情報交換していくと、どんどん関係が深まっていくように思います。当館でも支援者の方たちが来館されることが増えてきたので、こうした機会を大事にしていきたいと思っています。

私も含めた当館のスタッフのなかには、身近に障害のある人がいるという人たちがいます。実際に肉親に障害のある子がいるとか、その子の将来を考えると、そういった差し迫った問題として日々障害について考えている人たちです。そうした立場の人が起点となって、ある程度の時間をかけて、構えず焦らず、このような場をしっかりと位置づけて進めていくということが大事ではないかと思っています。



「アール・ブリュット MINO+」に出展された堀和暉さんの作品